広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第53号　2004　237－240

母子の発達に及ぼす関係性の役割に関する一考察

―反抗期の母子関係を中心に―

井　上　芳世子

(2004年9月30日受理)

Roles of relationship in the development of mother and a child :
Relationship of mother with children in the negativism age

Kayoko Inoue

In this article, I discussed the roles of relation between mother and a child in their development. The mother-child relationship is based on many interactions between them from the birth of the child, and mother's interpretation of her child seems to be profoundly related with the close mother-child relationship. One factor causing the development of mother and a child is changes in relationship between mother and the child, because mother must found a new way of parenting to coordinate the child's view point and her own as the child grows up. The process of the coordination brings about development of both mother and a child.

Key words : development, mother, child, relationship, coordination
キーワード：発達，母親，子ども，関係性，調整

問題と目的

近年，様々な虐待事件などが問題視されており，子育て支援は社会的にも大きな関心事である。そのような中，子育て支援の重要なポイントとして，親，子どもの両者が適切な発達をとげていけるような支援が求められているといえるだろう。

元来のBowlbyの愛着理論やS.Freudの精神分析理論などは，母子の関係性の質がその後の母子相互の発達に影響することを示してきた。その際，主に視点がおかれていたのは，子どもの発達に関してで，多くの研究の中で明らかにされてきたことは，子どもの適切な発達にとっての母子関係であった。しかし，近年子どもと共に共発達する存在としての母親へ焦点が向けられるにつれ，母親の発達に，母子間の関係性が大きく関連していることが明らかにされている（井上・湯澤，2002)。それでは，母子間の関係性とは，一体どのようなものであるか。また，関係性がどのように子ども，母親の両者の発達に影響しているのであろうか。

これまでの発達研究の中でも，“関係性”を手がかりに行われているものは多数ある。特に，ケアするという環境における女性の発達にとって，関係性が重要な位置にあることが示されているといえる（岡本，1999)。

しかし，この関係性について明確に定義づけをした論文は少なく，多くの調査結果は「関係性の調整」や「関係性の変容」が発達を促す要因として考察されているといえる。

そこで，本研究では，母子間の発達のキーワード的存在となっている関係性について改めて問い直すことで，どのような要因が，母子相互の発達を規定しているのかについて考察することを目的とする。

母子の関係性とはなにか

これまで，母子関係を捉えるには，母子の相互作用行動に焦点が当てられてきたといえる。それは，科学としての心理学が，客観的なデータを扱う必要があったためであろう。また，母親と子の両方の視点を取り

入れた関係性を取り扱うには，以下のような問題があった。まず，第一に，関係を築く対象者との関係は，対象となるパートナーの特徴や従属している集団，またパートナーとの力関係によっても異なってくるという“対象”を理解することが難しいことである。第二に，観察可能な質的データの分析上の困難さがある。第三に，人間相互の結びつきや関係性といった内的な心的プロセスを説明するには，心理学上の様々な理論を用いたとしてもかなりの部分の推定が必要となり，説明する上でも難しい（Hartup & Laursen,1999）。しかし，それでもなお母子の関係性が重要視されている理由として，愛着研究などに示されるように，ある一時点や表面にあらわれる母子の相互作用行動だけでは母子関係を語り尽くせないという現状があるからであろう。つまり，表面に表される母子の相互作用行動が例え同一のものであっても，平行して交わされる母子の主観的なやりとりが異なれば，それは子の発達にとって全く違った意味を持つようになるからである（遠藤，1992）。

それでは，母子の関係性とは，一体どのように形成されるのか。

Hartup & Laursen(1999)によると，Hinde (1976)は，関係性は行動の集合で，これらの集合は双方の影響プロセスを含んでおり，この相互依存は時間をこえ拡大し，その他の個人と社会的な構造の中に埋め込まれているとした。そして，連続した相互作用によって関係性が形成されるとしている。母親は子どもに対して愛着を確立するよりもずっと前から子どもと相互作用しなければならない。子どもとの関係づくりは，子どもの個性や特徴など何もわからない時から，相互作用行動をとおして始まっている。そして日常生活の中の，この母子間のやりとりが関係を形作っているというのだ。

しかし，母子の関係性は，その他の親密な関係性（友人，恋人など）に比較して，さらに大きな特徴を持っているといえる。これはすなわち，母子間に存在する非対称性だ。子どもは母親のようにうまく感情を伝達する能力を持っておらず，また親のニーズを理解する能力にも限界がある。さらに，親子のやりとりは，“持ちつ持たれつ”といった関係ではなく，責任や社会的な義務の上でも異なる。このことは，子どもが幼少であればあるほど，影響力があると考えられる（Russel, Mize, & Bissaker, 2002）。

そこで重要な要因となるのが，母親の子どもに対する主観的な解釈や意味づけである。単に同じように見える母子のやりとりであっても，そのやりとりをどのように解釈するか，どのように意味づけるかでその後の行動が規定されるからだ。これは，保育場面で，「親が変われば，子どもが変わる」などと保育者がもらす感想にも通じるものがあると考えられる。

このように見てくると，親子の関係性を理解するには，単なる相互作用行動の集合として関係性を捉えるのではなく，母親の主観的側面を含んだ関係性を捉えることが，母子関係のよりよい理解，またその結果もたらされる母子の発達を理解することにつながると考えられる。

鯨岡（1986）も，母子間の相互作用の中で，母親が子どもの下に何を感じ取っていたかというような母子の主観的，間主観的な経験を記述することが，母子関係の理解に欠かせない源資料であると述べている。母子間の間主観性は，母親のみならず，観察者によってさらに記述，理解されていく。このことは，大きな誤解や錯認を含む可能性がある。にもかかわらず，他者の主観性に関して何がしかのことが「わかる」というのは，相手と自分のあいだが通底していて，相手の主観的なものがこちらへとにじみ出てきたとでもいうような現象で，それが母親のみならず観察者にも通じるものであるとしている。母子相互の意図が顕在的に相手に理解されていくプロセスを見るためには，その母子間の間主観的な関係の展開の背後に何があるのかを理解しなければならない。つまり，その母子の生活実相や個人史，母親の主観的な子どもの受け止め方や，母親の価値観などへ切り込み理解しなければ，母子の生活世界の変容，すなわち母子の発達を見ていくことはできないだろう。

関係性がどのように母子の発達に影響しているか

ここでは，日常の子育ての中で行われている母子間のやりとりに焦点をあてた研究を中心に見ていく。そのため，母親がごく普通に経験する母子間の葛藤場面を扱った研究について考察する。

従来，母子間の葛藤やそれに伴う子どもへの否定的感情は，育児不安や育児ストレスなどと同様に，ネガティブなものとしてとらえられる傾向が見られた。しかし，近年の母子研究の中では，ある一定期間の子どもとの対立や否定的感情は，むしろ母親が日常的に経験する感情で，さらにはポジティブな影響を及ぼす側面を持っていることが明らかにされている（井上，2003）。また，母子間の葛藤とは，母親の意図と子どもの意図の間にズレが生じていることが予想できる。つまり，母子の相互作用の間にズレが生じ，その結果，母子間の関係性にもズレや変容が生じていること

が予測できる。すなわち，母子間の葛藤が，関係性の変容をもたらし，その結果，母子双方の発達を促しているのではないだろうか。

そこで，反抗期の幼児を扱った以下の研究結果より，母子間の葛藤がどのようにして関係性の変容をもたらしているのか，また関係性の変容は母子相互の発達を規定しているのか，規定しているとするならどのようなプロセスで母子双方が発達していくのかについて考察してみたい。

菅野（2001）は，2，3歳児といったいわゆる反抗期の子どもを持つ母親25名を対象に，子どもへの不快感情（育児のある状況における子どものある行動に対して経験される一時の不快感情）について分類，分析した。その結果，直接的な母子のやりとりがある場合に不快感情を感じる頻度が高く，日常的課題があるのに母親の要求に不従順である子どもに対するものと，日常的な課題はないが，べたべたしてくる，いたずらをするなどといった特定の行動をする子どもに対して，不快感情を感じていることがわかった。

さらに，この日常的な課題の有無が何を示すのか検討した結果，母親の子どもに対する発達的展望が関連していることが示された。発達的展望とは，過去から未来に対する時間軸で子どもをとらえている母親自身の語りである。つまり，子どもの成長・発達に対する母親自身の主観的な解釈である“関係性”ととらえることができる。日常的な課題のある場面では，母親は子どもを未熟なもの成長途上のものとして受け止めており，母子間の関係性に変化は見られない。一方，課題がない場面においては，子どもを過去・以前とは異なるものとして受け止めており，母子間の関係性は変化している。つまり，課題がない場面というのは，関係性の変化が生じたために不快感情が経験されていると考えられる。このことより，母子間の葛藤は，直接的な母子のやりとりが行われる中で生じ，そしてそのやりとりの中でも，子どもの変化を認識するようなやりとりにおいて，今までの母親自身が抱いていた子どもへの異なる主観的認知が生じ，関係性が変容していると考えられる。加えて，この関係性の変容を，母親自身は不快感情ととらえているように，母親の育児に対するとまどいや思い通りにいかない現状に対する苛立ちであると考えられる。

さらに，不快感情をもたらす子どもを母親自身がどのように受け止めているかについて，説明づけの観点から検討した結果，課題がある場面では，子どもの不従順に対し自分の要求を押し通そうという姿勢が見られるが，課題のない場面では，自分の関わり方ややり方に反省や迷いが見られることがわかった。このことより，母親は不快感情を経験することにより，これまでの自分の育児のあり方や子どもの成長について振り返っていると考えられる。つまり，子どもとの関係性の変容に出会い認識していく中で，育児の再方向付けを行っていくのではないだろうか。

坂上（2003）もまた，2歳児の反抗期の子どもを持つ母親25名を対象に，子どもの反抗や自己主張の本格化に，母親自身がどのように適応していくのかについて検討した。そのために，子どもが反抗する状況的要因についての説明や，どのような対応を母親自身がとったかについて語られた“短期的文脈”と，以前の時期との対比の上に述べられた母親の考えや対応の変化に関する“長期的文脈”を用いて分析した。その結果，特に第一子の母親（13名）において，以下のような特徴的な結果が見られた。まず，短期的文脈の分析より，母親は反抗する子どもに対して苛立ちを感じ，怒る，叩くといった母親自身に焦点をあてた自己焦点型の対応を取っていることがわかった。これは，子どもの認知能力や言語能力，自我や好奇心の発達といった子どもの成長によって，これまでとは質的に異なる子どもとの対立を経験しており，母親自身が困惑，混乱している状態を表しているといえる。しかし，そういった対応後に，子どもの視点に立った捉え直しをしており，視点の揺れを経験しているといえる。これはまさに，母子間に関係性の変化が生じていることを示す。そして，関係性の変化によって子どもの視点から自身の対応や子どもの行動について振り返る必要性を与えられた（突きつけられた）といえるだろう。

つぎに，長期的文脈の分析より，子どもの因果関係についての理解や著しい言語能力の発達によって，これまでの対応では行き詰まったり，子どもに負の変化が生じてしまうことをきっかけとして，子どもの発達やわが子の個性についてより理解が深まることとなる。そして，母子双方の視点を取り入れ調整した対応に変えることによって，自身の子どもにより適合したやり方や期待，見方を持つことができるようになった。まさに，子どもとの直接的なやりとりの中で，視点の揺れを通して，長期的には視点の調整の仕方を見出すことで，母親自身の視点と子どもの視点の調整を図ることを経験していたのである。

子どもの発達については，さらに具体的な記述が見られないので明確なことはわからないが，子どもの発達によって母親自身が適応させられているともみえる今回の結果から，子どもの側もさらに発達していることが推測される。母親側も，母親自身，子どもの両視点を相互調整しながら対立の解決方法を見出しただけ

でなく，子どもへの期待や認知をわが子の実情に合うよう修正することで，自己の焦点化した状態から脱したこと，さらに環境に工夫を図ったり自身の苛立ちを統制する方法を見出したりなどしていた。これらの母親の発達は，まさに柏木・若松（1994）が示した親としての人格発達に深く関連していると思われる。両者の関連をさらに検討していく必要があるだろう。

まとめ

本論文では，母子の関係性がどのように母子の発達に影響しているのかについて考察してきた。従来より指摘されてきた直接的な母子のやりとりの中で形成される関係性において，母親の子どもに対する主観的な解釈や意味づけがまさに関係性の質を表しているといえるのではないだろうか。そして，子どもの成長に伴うこれまでの母子のやりとりの質的な変化，すなわち関係性の変化によって，母親は子どもの成長や個性を理解し直し，自分自身の視点とも適合するように新たな対応を生み出していく。これはまさに関係性によってつくられる母子の発達プロセスといえるだろう。

関係性については，本論文の中でも述べたように，様々な点で分析や理解，説明の難しさがある。これまでの決められた理論や仮説から結論を導き出すことと異なり，データから探索的に結論を導いていかなければならない。その一つの解決策は，鯨岡（1986）も指摘しているように，対象とする母子にしっかり関与しながら観察することであると思われる。

最後に，より質の高い育児支援が求められている現在，実践に直結しうるような，育児の内実に迫る発達研究が不可欠である（坂上，2003）ことを痛感する。

引用文献

遠藤利彦　1992　愛着と表象－愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観－　心理学評論，**35**，201-233.

Hartup, W. W. & Laursen, B. 1999 Relationships as developmental contexts: Retrospective themes and contemporary issues. In W. A. Collins & B. Laursen (Eds.), *Relationships as developmental contexts: The Minnesota symposia on child psychology*, Vol.30(pp.13-35). Mahwah, NJ: Erlbaum.

井上芳世子　2003　母親としての発達に関する研究の展望－葛藤場面に注目して－　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部（教育人間科学関連領域），**52**，227-230.

井上芳世子・湯澤正通　2002　夫・子どもとの関係，対人態度が母親としての成長に及ぼす影響　心理学研究，**73**，431-436.

柏木惠子・若松素子　1994 “親となる”ことによる人格発達－生涯発達的視点から親を研究する試み－　発達心理学研究，**5**，72-83.

菅野幸恵　2001　母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ　発達心理学研究，**12**，12-23.

鯨岡　峻　1986　母子関係と間主観性の問題　心理学評論，**29**，506-529.

岡本祐子　1999　女性の生涯発達とアイデンティティー個としての発達・かかわりの中での成熟－　北大路書房.

Russell, A. Mize, J. & Bissaker, K. 2002 Parent-child relationships. In P. K. Smith & C. H. Hart (Eds.), *Blackwell Handbook of Childhood Social Development*, (pp.205-222). United King.

坂上裕子　2003　歩行開始期における母子の共発達：子どもの反抗・自己主張への母親の適応課程の検討　発達心理学研究，**14**，257-271.